

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 3 日現在

機関番号：17102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：24652123

研究課題名(和文)日本語母語話者の韓国語習得における文法知識と語彙知識が読解に与える影響について

研究課題名(英文)The effects of grammatical knowledge and lexical knowledge on reading test in Korean language acquisition by Japanese learners.

研究代表者

斉藤 信浩(SAITO, NOBUHIRO)

九州大学・留学生センター・講師

研究者番号：20600125

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円、(間接経費) 570,000円

研究成果の概要(和文)：韓国語習得研究の際に、被験者のレベル測定のためのテストは不可欠なものであるが、そのための有効なテストが見られなかった。本研究では、韓国語の語彙能力を最小限の項目数で測定することによって、簡易的で有効な測定テストを開発した。96問の語彙項目と12問の読解テストを日本語母語話者61名を対象に実施し、その結果を項目応答理論を基盤に分析した結果、信頼性の高い148項目を抽出した。この語彙テストの結果と読解テストの結果を、構造方程式モデリングで検証したところ、語彙能力が読解と密接な因果関係があることが分かった。この語彙能力テストは広く公開し、多くの韓国語習得研究に使用され追検証されることを望んでいる。

研究成果の概要(英文)：There was no effective test measuring the lexical knowledge of the Korean language. Therefore, the present study intended to develop the test of lexical knowledge for Korean as second language learners(KSL). The total of 96 lexical questions was administered to 61 KSL learners. Using the item response theory(IRT), a half of 48 items were selected as the final question items. Cronbach's alpha reliability coefficient yielded a very high at 0.98, showing exceptionally high reliability of the test. Further more, as the result of exploring the scores by structural equation modeling(SEM), the lexical knowledge have strong relation to the reading. The final version of lexical knowledge test is published for free and open use.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：外国語教育

キーワード：韓国語習得 語彙テスト レベル測定 読解能力

1. 研究開始当初の背景

言語習得の研究では、学習者の言語能力を調査時点で客観的に把握する指標を確保することが重要である。単に、言語の学習歴や所属しているクラスのレベルでは、個々の学習者の言語能力を正確に示しているとは言えない。韓国語の習得研究においては、韓国語能力試験 (TOPIK) やハングル能力検定試験の合格級によって言語能力を大まかに示すことができる。しかし、特定の級に合格してからも学習を続けているため、習得調査を行う時点での言語能力の代用指標として使用するには不十分である。英語や日本語の習得研究の分野においては、ACTFUL-OPI や SPOT など、既に信頼性が検証された言語能力を測定するテストが存在しているが、韓国語の習得研究では利用可能な言語測定テストが存在しなかった。韓国語の習得研究はまだ途に就いたばかりであり、学習者の増大、学習背景の多様化などの要因からも、実証的な検証型の習得研究は今後益々要求される。そのために、言語能力の測定テストは必要不可欠のものであった。

2. 研究の目的

言語能力を測定するテストには3つの特性が求められる。それらは、(1)対象者の標準化が可能な正確さ、即ち妥当性、(2)他の対象者への汎用的な適用が可能な再現性、即ち信頼性、そして、(3)実施のための簡易性 (注1)、である。石田 (1992) では、(1)妥当性と(2)信頼性が評価の測定として最も重要なものであると述べているが、加えて、現実的な問題としてテストの所要時間が長くなると、受験者の疲労により判断力が下がり、妥当性と信頼性の指標にも影響してくる。従って、必要最小限度のテスト項目で、被験者の言語能力を測定することが肝要である。宮岡・玉岡・酒井 (2011) は、第二言語として日本語を学習している中国語母語話者の語彙能力を48問でこれら3つの特性を満たしたテストを開発した。彼らは、項目応答理論 (Item Response Theory; IRT) を使ってテストの質問項目を分析し、各質問項目の適切性が高く、全体として信頼性の高いテストであることを示した。この語彙能力テストは既に複数の研究で使用され、信頼性が再確認されている (c.f. 斉藤・玉岡・母 2012; 大和・玉岡・初 2013 など)。本研究では、宮岡・玉岡・酒井 (2011) の日本語語彙能力テストの枠組みを援用し、大友賢二・中村洋一・秋山實 (2002) によって開発された項目応答理論用のテスト・データの分析プログラム (Test Data Analysis Program; T-DAP ver.2.0) を用いて、習得研究の能力測定の指標となる、韓国語の語彙能力テストを開発することを目的とする。

3. 研究の方法

韓国語の語彙能力を測定するために、特定の語彙を抽出しなくてはならない。そのために、2つの視点を基準とした。第1の視点は、TOPIK に既出の語彙を基にして、1級を初級、2級を初中級、3級・4級を中級、5級・6級を上級に分け、各級ごとに12語を選択する。第2の視点は、初級から中級段階における既習可能性である。学習者がそれらの語彙を学んでいないのであれば、学習効果と関連付けた分析にならない。既習語彙の抽出については、長谷川・曹・大名 (2012) で選定された教育基幹語彙を援用した。教育基幹語彙とは日本で出版されている主要な24種類の教科書の教科書の初級相当部分と中級相当部分に必ず出て来る語彙の最大公約数である。

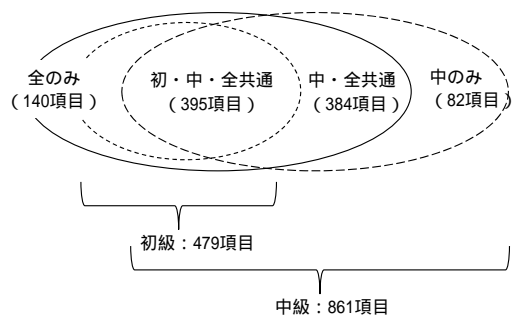


図1 教育基幹語彙長谷川・曹・大名(2012)

教科書の初級相当部分に479語、中級相当部分に861語が必ず含まれており、学習者はこれらの語彙を共通で学んでいると推定される。即ち、これらの教科書を使用していない学習者であっても教育基幹語彙の大部分を学んでいることが想定できる。従って、韓国語能力試験の語彙と教育基幹語彙を照らし合わせて、初級12語と初中級12語の箇所は教育基幹語彙と被るもののみを選定し、中級は6語を教育基幹語彙と被るものを選定し、6語を被らないものから選定した。

宮岡・玉岡・酒井 (2011) が作成した日本語の語彙能力を測定するためのテストでは、品詞と語種の双方の分類から分析できるように語彙が統制されている。下位カテゴリが設けられ、いくつかの要因 (factor) に分けて統制しておくこと、結果の分析を多方面から詳細に分析することが可能である



図2 宮岡他(2011)



図3 本研究

形容詞、動詞、名詞の3種類の品詞による下位カテゴリおよび漢字語の語彙 (漢字語)

と固有語の語彙(固有語)の2種類の下位カテゴリを設定した。

以上のような概念で選定を行い、語彙抽出の過程で妥当性を確保し、合計 96 語の語彙を設定した。分析の過程で、各下位カテゴリと全体の信頼性を出し、次いで項目応答理論のプログラムを用いて、項目通過率、実質選択肢数を出し、正答と錯乱肢の関係を考慮して、問題数を各分野 12 語まで絞り、48 語の語彙能力を測定するテストを作成する。

調査は、福岡県にある 4 つの大学と山口県にある 1 つの大学、合わせて 5 つの大学で行った。これらの 5 つの大学で専攻あるいは副専攻で集中的に韓国語を学んでいる日本語母語話者の学習者 61 名(男 3 名、女 58 名)を対象に調査を行った。調査実施日の年齢は、平均で 20 歳 7 か月、標準偏差は 13 歳と 8 ヶ月であった。大学の学部課程の 2 年生と 3 年生を中心に調査を実施したが、学習歴の平均は、2 年と 3 ヶ月であり、学習歴の 2 年以下を下位群(25 名:男 1 名、女 24 名)、2 年以上を上位群(31 名:男 2 名、女 29 名)と設定した(注 12)。留学月が 10 ヶ月以上、12 ヶ月未満の者が下位群の中に 1 名、上位群の中に 4 名いた。試験時間は 90 分であり、試験監督をつけ、辞書の使用を禁止し、2013 年 6 月~7 月に調査を実施した。

4. 研究成果

項目応答理論のプログラムを利用し、標準項目適切度(SATOT)の順位を基準に 48 語を抽出し、信頼性の検定と下位カテゴリ項目の統計的分析を行った。クロンバックの信頼度係数の検定では $=.95$ であり、極めて高い信頼度を示した。カテゴリごとに見ても、形容詞は $=.86$ 、動詞は $=.83$ 、名詞は $=.88$ となり、やはりどれも高い信頼度を示した。また、上位群と下位群の得点の差を t 検定によって比較した結果、どのカテゴリにおいても 01.%水準で有意差が見られ、レベルの測定ができていたことが分かった。そして、カテゴリ間の得点を分散分析によって検証した結果、品詞では差が無く、語種では下位群で差が無かったが上位群で差が見られた。このことは品詞のカテゴリで測定テストとして良く機能しており、語種でも上位群以外では良く機能していることが分かった。

日本語能力試験(JLPT)や TOEIC、TOEFL では、得点分析が詳細に行われており、測定力が保障された信頼性の高いテストが用意されている。そのため、日本語の習得研究の際にはこれらを利用して被験者のレベル分けを行うことが可能である。しかし、韓国語の習得研究の分野においては、研究用に用いられるこのような測定テストが見られなかった。本研究が作成した言語能力測定テストは、宮岡・玉岡・酒井(2012)

と同様に、下位カテゴリを設けて、テスト構成を行い、検証したことが画期的である。単なるレベル分けの用途のみならず、習得研究の分析の段階で、品詞による角度からの検証、語種による角度からの検証が可能であり、より詳細な分析項目を立てることができる。

この語彙能力テストが、実際に読解能力と因果関係があるかを構造方程式モデリング(structural equation modeling; SEM)検証した結果、品詞別に見ても、語種別に見ても、語彙能力の潜在変数は、読解に有意な因果関係があることが観察され、本研究の成果が信頼に足る測定テストであることが確認された。

この韓国語語彙測定テストは、斉藤・玉岡(投稿中)において、作成した韓国語語彙能力測定テストは一般に公開し、自由なリソースとして提供する予定である。今後、この韓国語語彙能力の測定テストが多く、この韓国語語彙能力の測定テストが多くの習得研究で使用され、信頼性に関する追報告が上がって来ることを望んでいる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

投稿中、斉藤信浩、玉岡賀津雄、項目応答理論による韓国語語彙能力テストの開発、朝鮮学報、朝鮮学会

〔学会発表〕(計 2 件)

2013.04、斉藤信浩、信頼性の検定と韓国語語彙能力テストの構築について(講義+質疑応答)開催日:2013 年 4 月 27 日、福岡韓国朝鮮語教育研究会、九州産業大学 2 号館 W502 教室。

2013.12.07、斉藤信浩、玉岡賀津雄、韓国語語彙テストの開発-項目応答理論と信頼性の検定、朝鮮語教育研究会第 60 回大会、

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

斉藤 信浩 (SAITO, Nobuhiro)
九州大学・留学生センター・准教授
研究者番号：20600125

(2) 研究分担者

玉岡 賀津雄 (TAMAOKA, Katsuo)
名古屋大学・国際言語文化研究科・教授
研究者番号：70227263